国際演劇交流セミナー 2017-2018

International Theater Exchange Seminar 2017-2018

ごあいさつ

一般社団法人日本演出者協会 理事長
流山児祥

日本演出者協会の国際演劇交流セミナーが始まって今年で 20 年の節目の年を迎えることになりました、関係各位に厚く御礼申し上げます。1999 年から文化庁の本格助成も始まって協会国際部は世界各国の演劇人と出会いワークショップ、レクチャー、シンポジウム、リーディングなどを行う国際演劇交流セミナーを 20 年に渉って企画開催してきました。世界には、豊かで多様な演劇が存在することを学び、共有しあうことは演劇の根本である《他者》との出会いです。国際演劇交流セミナーは、日本演劇が思考してきている所謂、明治以降の近代劇＝欧米中心の思考をドラスティックに変え、演劇を必要とする世界各地の現代演劇のもう一方の豊かさ（オルタナティブ）を体験する旅でした。

2015 年には韓国、パレスチナ、オーストラリア、デンマーク、メキシコ、2016 年にはアフガニスタン、マカオ、ウエールズ、といった地域の特集。勿論、ロシア、フランス、イギリスといった国の演劇人との交流も同時に行っています。2017 年、2018 年の本合併号には韓国、フランス、台湾、アルゼンチン、スイス、デンマークとの試みの特集が掲載されています。わたしも参加したインドネシア、台湾、韓国の特集は貴重で面白い体験でした。わたしはインドネシアには 2 度公演してインドネシア演劇が如何に社会に、地域に根差しているか、その身体表現の豊かさの根源を共にワークショップすることで再確認しました。韓国演劇のトップシーンを牽引している劇作・演出家：パク・クニョン氏の独自のワークショップは日本の若手演出家にとって目から鱗のプレゼントになりました。今、韓国と並び最も芸術に力を入れている台湾のトップ・リーダー：汪兆謙氏のドキュメント演劇も多くの参加者を集め好評でした。また、アルゼンチンのエミリオ・ガルシア・ウエービ氏の「既成概念を揺るがす演出を～その創造のプロセスとは何か～」は京都と東京の 2 か所で各 6 日間開催し多くの参加者がアルゼンチンの鬼才と衝撃的な実験を重ねました。舞台芸術は既成概念の破壊とその後の創造の果てにあるのです。

世界中の地域の演劇人、演出家と出会い彼らが彼の地で実践している演劇の多様性を学び共有し、共に実験して、社会に向けて普及のための公演を行うことで日本の演劇人、とりわけ若い世代の演出家を育

成する事業が国際演劇交流セミナーです。演劇の持つ真の自由さを獲得し、社会という《他者》のために文化芸術は存在します。地球上、それぞれの場所の必要性から生まれる演劇の多様性を重視することはわたしたちの課題です。いま、世界はネオ・ナショナリズムとポピュリズムの波に翻弄されています。日本の若者たちは「私はダメだ」「俺はクズだ」と思う人が米・中・韓と比べて突出しているという検査結果が出ています。スマホとインターネットの谷間に「わたし」という「個」が孤立し彷徨う 2019 年の現在です。まもなく、改元。日本を変えたあの 3・11 東日本大震災から 8 年です。3・11 を忘却の彼方に押しやるのではなく、忘却の痕跡を自らの身体に刻むのがわたしたち表現者（当事者）の仕事です。2015 年、東京と福島で開催したパレスチナ特集で来日したイエスシアターと福島の演劇人の交流は今も続いています。演出家：イハッブ氏は「文化なしの闘争はない、社会にとって演劇は必要不可欠だと想える若い世代を育てたい」語った言葉は今も生き続けています。この想いがこの事業の根本です。

2020 年代をどんな時代にしたいのか？　が演劇人に問われています。少子高齢化の超格差時代到来が予測される時代、わたしたちは決してネオ・ナショナリズムやポピュリズムに屈することなく国境を越え世界の演劇人たちとともに歩んで行きます。

また、企画の具体化にあたっては、多くの研究者、翻訳家、評論家、関係各国の大使館、国際交流基金などにご尽力いただいていることに感謝、そして何よりも文化庁のサポートに厚く御礼申し上げます。そして、何よりも、この年鑑が多くの若い演劇人に読まれることを切に願っています。

（2019 年 3 月 5 日）

台　湾　特　集

【INTRODUCTION】

アジアの演劇を学ぶシリーズ
「ドキュメント演劇」
ー 自分史から着想する 6 日間 ー

企　画　：　柏木俊彦

台湾特集2018

この企画に至るにあたり、2 回、台湾に渡った。今回の講師である汪兆謙、許正平の 2 名とも面識はなく、阮劇団の情報もほとんどなかった。台湾すら訪れたこともなく、そんな者が担当を引き受けて良いのか？という責任感も渡台の要因だった。

きっかけは理事長の流山児祥氏。今、面白いヤツらが台湾にいるぞ。と国際部に声が掛かり、アジアでは、香港、タイ、インドネシアと流山児氏と似たような歴訪のある私が担当に選ばれた。面白味を感じたのは、台湾語で上演しているという情報だった。消えゆく言語というキーワードにも惹かれた。たとえば、インドネシアでは、公用語はインドネシア語だが、ジャワ語、バリ語などは、少し路地を入れば、今も日常で使われている。インドネシアでは、民族ごとに言語が違う。必要に応じて現地では使い分けているという状況だ。果たして、台湾語はどうなのだろうか？　そんなことも台湾に強く興味が湧いた一因だった。

このような経緯ではじまるわけだから、台湾について早速リサーチをはじめた。いくつかの本を漁るも、中々、嘉義という土地は出てこない。唯一、阿里山という台湾の名山の玄関口というくらいだ。シンポジウムで流山児氏から言及のある『KANO』という映画も、嘉義農林学校の感動のストーリーがメインで、嘉義を詳しく知る手立てにはならなかった。ただし、『KANO』では、嘉義とも感動とも違う学びがあった。もちろん、日本が台湾を統治していたことは知っていたが、確実に悲しい差別が根底にあったということだ。

そんなわけで現地に向かう。嘉義は台北から電車で 3 時間ほど。汪兆謙と落ち合う。嘉義駅中心も、台北に比べるとずっと長閑な場所だが、そこから、さらに車で 20 分。農場と牧場に挟まれた道路の先に、嘉義縣表演藝術中心（嘉義アート・パフォーマンス・センター）が現れる。お城のような構えに驚く。しかも、そのセンター内の一角にある事務所スペースに、オフィスも構え、3 人ほどの事務員もいた。

2 度目の渡台で、阮劇団での台湾語上演『嫁粧一牛車』の稽古を見せてもらう。第 2 外国語では中国語（北京語）を選択していたが、台湾語は全く分からなかった。稽古のエネルギーはすごかった。ここで、今回のセミナーの正式な打ち合わせを行うと、ドキュメント演劇を、日本でのワークショップで行いたいとの希望があった。2018 年夏に、講師らが創作したドキュメント演劇が、エディンバラ演劇祭に招聘されているとの情報もあった。ここで、台湾語を絡めたワークショップのプランは崩れ去った。

消えゆく言語、台湾語は「白色テロ」の言語統制が大きな要因だと分かった。1987 年の戒厳令解除。すぐ昔のこと。私たちは、隣の国での出来事をあまりにも知らなすぎる。レクチャーやシンポジウム、そして年鑑で、少しでも知る機会が増えることを望んでいる。また、リサーチを主に行い創作されるドキュメント演劇は、講師らが台湾人としてのアイデンティティーを探すきっかけとなったと言及があった。今回の参加者にも、似たような感覚が湧いたと感想があったことは嬉しいことである。

【 in 東　京 】　　会　場　：　芸能花伝舎

2018 年 7 月 17 日(水)～22 日(日)

「見えない東京」をテーマとし、5 日間でドキュメント演劇を作り発表。
自分史を基に、「ドキュメント」（写真・文章など客観的な、そこに関係する物）や、
その元素（言葉・声・味・食べ物・・・ 等）を参加者が用意した。
この「ドキュメント」をもとに、講師と集団創作のスタイルで、実験的に作品を創り、
最終日に発表。

【レクチャー】

■ 7 月 17 日（火）　18：00 ～ 19：00

「台湾南部の演劇の現状」

〔 講　　師 〕汪 兆謙　許 正平

講師より台湾の歴史・演劇史・劇場について。
講師の拠点である嘉義での活動についての紹介に加え、
台湾南部での創作活動についてのレクチャー。

■ 7 月 22 日（火）　17：00 ～ 18：30

「ドキュメント演劇について」

〔 講　　師 〕汪 兆謙　許 正平

前半、講師が定義する「ドキュメント演劇」についての解説が行われ、
後半は、参加者と見学者が混じりながら「ドキュメント演劇」の可能性について
語りあう機会となった。

【シンポジウム】

■ 7 月 17 日（火）　19：00 ～ 22：00

「これからのアジアの演劇について」

〔 講　　師 〕汪 兆謙　許 正平
〔 パネラー 〕流山児祥（流山児事務所）　大橋 宏（舞台演出家、劇団 DA・M）

シンポジウムでは、アジア人同士でのコラボレーションについて。
アジアの演劇の課題について語られた。

【ワークショップ】

■ 7 月 18 日（水）　18：00 ～ 22：00

「ドキュメント演劇」についてのレクチャー。事前課題「見えない東京」というテーマの写真、「記念の品」について、参加者それぞれが持ち寄り、1 人ずつプレゼンテーションを行った。

■ 7 月 19 日（木）　18：00 ～ 22：00

引き続き、事前課題「見えない東京」テーマ写真、「記念の品」について、
1 人ずつプレゼンテーションを行う。
次に、2 人ずつのグループ、7 つのチームにわかれて、お互いをインタビュー。
インタビューから、3 分間のパフォーマンスと創り出し発表を行った。
宿題として、パフォーマンスを台本にする課題が出された。

■ 7 月 20 日（金）　18：00 ～ 22：00

台本化されたパフォーマンスについて、今度は講師が個別インタビュー。
インタビュー終了後、講師より構成案が出される。
構成案をもとに、最終日の発表に向けたリハーサルがはじまった。

■ 7 月 21 日（土）　13：00 ～ 17：00

引き続き、最終日の発表に向けたリハーサル。プロジェクター、
照明の ON／OFF、小道具も追加され、講師より細かい指示もとび始めた。

■ 7 月 22 日（日）　13：00 ～ 15：00

15：30 ～ 16：30　創作発表

ワークショップでは最終の通し稽古を行い、創作発表が行われた。

通訳・翻訳　陳 彦君　横山洸大　担当　柏木俊彦　山上 優　流山児祥

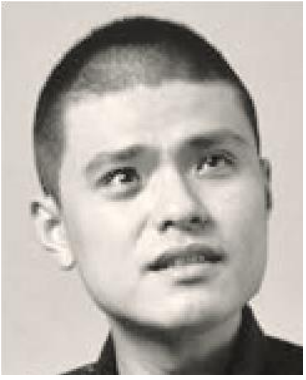
ワークショップ内容補足

「2015 年、阮劇団はヨーロッパのコンテンポラリードキュメンタリー演劇の手法と台湾本土のドキュメンタリー映像を融合させたスタイルで、劇団初のドキュメント演劇作品『家の妄想』を発表。以降、他劇団や演劇フェスティバルとの共同創作で『禁区』、『使用禁止 2.0』などのドキュメント演劇作品を製作。台湾の辺境地や社会弱者群など、今まで主要メディアに注目されることのなかった人々の日常的空間を題材に取り上げ、それらへの社会の関心を喚起することを目指している。同時にこのプロセスや成果をもとに国境を越え、アジアでの「ドキュメント演劇」の可能性と新たな展開を模索している。今回の東京ワークショップでは、「見えない東京」をテーマに参加者と個人の生命や日常の経験と地方都市の課題及び歴史的観察をドキュメント（写真、映像、食べ物、歌、ニュース報道或いは事件）を媒体として紐付けし、上演方法とスタイルを共に模索しながら、集団創作による「ドキュメント演劇」の実験作品を作った。

『家の妄想』について

2015 年、阮劇団の演出家・汪兆謙と劇作家・許正平は、台北芸術祭の招聘を受け「ドキュメント演劇」というスタイルで『家の妄想』を発表。この公演の後、汪兆謙と許正平は「妄想」をテーマに現代の小人物の失望、追及と所属感の関係を探求する長期創作計画を実行中。

ワン・ジャオチエン / 汪兆謙 / Jhao-Cian Wang



台湾国立台北芸術大学 大学院 劇場芸術演出コース修士

台湾阮劇団（Our theater）設立者。芸術総監督兼団長。

実験劇場「新嘉義座」創立者。 国立台北芸術大学在学中に故郷の嘉義で阮劇団を旗揚げ。 以来、台湾中部の嘉義地区において演劇創作と演劇教育を推し進める。

近年は「大衆文化」を創作の主軸とし、「大衆文化と現代劇場」のリンクの可能性を模索。

主な創作・演出作品に『マクベス：paint it black』、『城市恋歌進行曲』、『愛銭 A チャチャ』、ドキュメント演劇計画『使用禁止』、2018 年 エジンバラ演劇フェスティバル招聘作品の『家の妄想』など。芸術と社会の連結のスタイルを積極的に探究する。

シュー・チェンピン / 許正平 / Cheng-Ping Hsu

台湾国立台北芸術大学 演劇修士 演劇創作コース修士課程修了 現在、台湾の多くの大学にて戯曲創作の講師を務める。戯曲、小説、随筆と様々なスタイルの文章を執筆。数多くの受賞歴を持つ。執筆作品に随筆『煙火旅館』（2002）、短編小説集『少女の夜』（2005）、

映画シナリオ『花蓮の夏』（2006）など。近年の舞台戯曲作品には『陳明章のラジオ』（2015）、『家の妄想』（2015）、『双城紀失』（2016）、『城市恋歌進行曲』（2017）、『禁区』（2017）、『使用禁止 2.0』（2017）、2018 年 エジンバラ演劇フェスティバル招聘作品『水中の家』（2017）など。

【 THE TEXT 】

レクチャー 1「台湾南部の演劇の現状」
7 月 17 日（火）18：00 ～ 19：00
〔講師〕汪兆謙　許正平

○　汪

はじまして、みなさん。台湾の嘉義で活動しています、汪兆謙（ワン・ジャオチエン）と申します。よろしくお願いいたします。嘉義は台湾南部の都市ですが、あまり有名ではありません。そんな都市での活動を、ここでご紹介できることを嬉しく思います。

私は嘉義で、阮劇団（Our THEATRE）という劇団を主宰しています。私はこの劇団を 18 歳のときに創立しました。演劇は台北が中心ですので、南部を中心に活動しているのは、かなり珍しいことだと思います。

まず、簡単ではありますが、台湾の歴史の話をします。

1949 年というのは台湾にとって非常に重要な年になります。中国から国民党政府が台湾にやってきた年で、台湾にとって 2 つの大きな影響を及ぼしたと考えています。

1 点目は、「白色テロ」という思想的コントロールです。2 点目は、文化の制限と、言語統制を図ったことです。今までの言葉が話せなくなりました。演劇は、日本の影響で新劇が発展していましたが上演ができなくなり、元々ある台湾の伝統芸能も上演できなくなりました。「白色テロ」は 1987 年まで 40 年近く続きました。

1980 年代後半、ようやく台湾人は海外に渡航する機会を持ち、見聞が広がり知識を蓄え、時の政府に対する反抗を強くしていきました。この流れに政府も妥協案として、劇団を作ることを許可しました。

ここからは、台湾の劇場について紹介します。台北には、1987 年に設立された國家戯劇院（国立劇場）と國家音樂廳（国立音楽ホール）があります。商業演劇の劇場として活用されています。また、2002 年に設立された牯嶺街小劇場は、小劇場の中で代表的な劇場です。台湾には、30 年から 40 年前には、1000 人収容を超える劇場か、200 人以下を収容する劇場しかありませんでした。ここ 10 年くらいで、政府だけでなく民間でも必要性を感じ、400 ～ 500 人収容する中型の劇場が増えてきました。

1992 年、台湾全体の文化発展とコミュニティ形成に力を入れる政策が施行されました。1997 年には政府が、青少年を中心に戯曲や舞台に関わる機会を創出しようという計画を推し進めました。2000 年に入ると、台北、高雄という中心都市以外にも、文化発展のため地方の多くの都市で大学を設立。大学には演劇専門の学科も作られました。また、芸術祭などが、地域でも多く開催されるようになりました。政府は、ここ 10 年、特に活発に文化に力を入れており、2016 年に台中国家歌劇院（オペラハウス）、2018 年には高雄に衛武營國家藝術文化中心（芸術文化センター）ができました。

ここまで、台湾全体のことを話してきました。今度は、私の活動拠点である嘉義についてもお話します。嘉義とはどんなところでしょうか。嘉義という地区は台湾の都市の中で 1 番、老年化が進んでいると言われています。そして、人口が毎年減る。その減り具合も、台湾の都市の中で 1 番です。台湾の中で、1 番お金を持っていない都市でもあります。人もいないしお金もない「文化の砂漠」と、生まれ育った嘉義を私は自虐のネタとして形容しています。

それでは、なぜ、私はこの「文化の砂漠」で活動をしているのか。この話は 20 年前に遡ります。当時、私は高校生でした。演劇に興味もなく、舞台も生で見たことがない。全てのはじまりは、高校で演劇部に入ったことです。本当は、バスケットボール部に入りたかったのですが上手くないため、演劇もたいして知らず、演劇って何？ くらいの気持ちで演劇部に入りました。前述した 1997 年に施行された青少年を中心に戯曲や舞台関連に関わることを推奨しようという計画に、通っていた高校が選ばれ、そこから舞台との関わりが緊密になりました。続けているうちに、なんて面白いのだろう、と感じました。他校との交流や新しい発見も沢山あり、自然と演劇にのめり込んでいきました。その頃、台北で舞台を見る機会がありました。そのとき、台北には劇場があり沢山の演劇公演があるのに、なんで自分の住んでいる嘉義には何もないのだろう、という疑問が湧きました。その後、台北の大学に入り演劇を専攻します。そして、2003 年に劇団を設立しました。

嘉義では演劇する環境はありません。嘉義で演劇をはじめたときは、チラシは自分で描きました。嘉義では、稽古場もなく、自分の通っていた高校の夏休みに教室に潜り込んで稽古をしていました。上演する劇場もなく困っていました。使わなくなった嘉義市内の電鉄のプラットホームを無断で使用して公演を行ったこともあります。2005 年、高校に潜り込んでの稽古が学校にばれてしまいました。しかし、高校の先生が同情したらしく、自宅を稽古場と上演する場として貸してくれました。当時、小学生だった先生の娘は、大学生で演劇を専攻し、今は、私の劇団で活躍しています。

同じく 2005 年、嘉義にアートセンターが設立されます。すごく大きい施設です。大小いくつかの劇場があり、稽古場も幾つか併設され、オフィススペースもありました。どうしても、ここに劇団のオフィスを構えたかった。大学の卒業の年でもあったので、台北の居を引き上げ嘉義に完全に戻ってきました。

では、この嘉義で、私は何をすべきだろうか。台湾の文化中心は台北で、地域には文化はほとんどない。人もいない。しかし、空間はある。伝統もある。そこで、今、演劇の公演では使われなくなり、しかし台湾人が使ってきた台湾語での上演を考えました。海外の戯曲を台湾語に翻訳し、台湾の文化に添って翻案した上演を行ってきました。そこで幾つか気付くことがありました。台湾南部で舞台文化を発展させるためには、創作だけでなく、研究、そして、若者が学ぶ環境を作ることが必要だと。この 3 つを組み合わせながら、台湾南部での活動をしています。

嘉義の中心部には、すぐに足を運べるように自分たちの小さな劇場も作りました。演劇を見る機会の少ない山間部の子供たちには、アウトリーチ活動として小学校や中学校での演劇ワークショップを盛んに行っています。

ほか、嘉義のアートセンターでは、一般の方にも演劇に触れてもらえるよう「草草戯劇節（フェスティバル）」を開催しています。この中で一番重心を置いているのは、青少年に向けたプログラムです。半年間のワークショップや稽古を行い、このフェスティバルで発表するというものです。嘉義以外のアーティストも招聘しています。沢山のアーティストに嘉義へ足を運んで貰いたいからです。それから、「草草戯劇節（フェスティバル）」野外でのパフォーマンスも多く企画しています。水の中、森の中など色々試しています。今後は、海外のアーティストも招聘していきたいと考えております。

嘉義は、人は少ないですが、人間と土地にエネルギーがある場所で、今後も発展できる所だと考えております。

ここからは、一緒に来ている劇作家の許正平が、もう 1 つの活動を紹介します。

○　許

みなさん、こんにちは。許正平（シュー・チェンピン）です。汪兆謙（ワン・ジャオチエン）は、演出家でありプロデューサーの立場であるため、色々な話をしなければならないのですが、私は劇作家ですので、戯曲に関わることを話していきます。

私は 1975 年生まれで、1998 年に台北の大学院で戯曲を専攻しました。台湾では、1970 から 1980 年代に生まれた劇作家は可哀想な存在と言われています。なぜかというと、1990 年代の台湾はポストドラマが発展し、より身体をメインにしたパフォーマンスが行われ劇作家は大切にされない存在だったのです。劇作家がいなくても劇場ではパフォーマンスが行われている、もう学ぶ必要はないだろうと、からかわれたりもしました。2000 年から 2008 年まで、自分が書いた戯曲で上演されたのは 3 本のみ。戯曲そのものがあまり必要とされていなかったと感じています。だから、その間、小説や映画のシナリオを書いていました。若者たちも、演出家や俳優になりたい人は多かったが、劇作家になりたい人は少なかった印象です。

2008 年、生まれた地の台南に戻りました。台北では恋愛を題材として書いていました。台北を離れてみると、地域で求められるものが違うのだと感じました。故郷や都会以外の生活に根ざしたテーマの戯曲が、台北以外の地域で発展していると気付きました。台南の劇団と仕事をすることが多くなりました。より台湾人そのものを意識した作品を作ろうと考えました。北京語と台湾語を混ぜたりしました。しかし、台南の劇団は年を追うごとに、台北の観客に受ける作品を創ろうという流れになっていきました。台南だけでは観客が少ないからです。そして、台北の方が作品を創るにも安価という理由があり、2015 年に台北に移ってしまいました。

その頃から、嘉義の阮劇団（Our THEATRE）と行動を共にすることが多くなっていきます。自分の変化としては、強く自分の住んでいる土地、そして土地の歴史に注目していきました。よりドキュメンタリー色も強くなっていきました。ヨーロッパのドキュメンタリー演劇に影響を受けながらも、この地ならではの創作方法や手段があるのではないかと模索しています。

私は、台湾南部で台北中心ではない視点で舞台作品を創っているという自覚があります。台南で舞台活動をしていく上で難しいことは、観客が少ない中でどうやって舞台作品の良さを伝えていくのかということです。そして、これまでの国際交流は台北が中心でしたが、南部にも広げていくこと。いろんな外部の影響を受けながら、しかし、自分たちの文化を育てたいという思いがあります。「文化の砂漠」という言葉がありました。その砂漠でも綺麗な花を咲かせるよう頑張っていきたいと思っています。

シンポジウム　「これからのアジアの演劇について」

19：00 ～ 22：00

〔講　師〕汪兆謙　許正平

〔パネラー〕流山児祥（流山児事務所）　大橋宏（舞台演出家、劇団 DA・M）

○　柏　木

今回は、特に近年、台湾での活動が著しい流山児祥さん、そして広く数多くアジアで活動をしている大橋宏さんをパネラーでお招きして「これからのアジアの演劇について」というテーマで、講師を交えてながらお話ができればと考えています。よろしくお願い致します。では、流山児さんより簡単にご自身の台湾やアジアの活動から伺えますか。

○　流 山 児

台湾との付き合いは 2002 年、ですから 16 年も台湾の人たちと出会っています。1 番長く続いている国のひとつです。中国もそうだし、韓国はもっと長いですね。1991 年からです。インドネシアには 2 度、行っています。とりわけ、韓国、中国、台湾、そしてインドネシアもそうですね、通じるのは、日本が占領した国であるという事。大橋さんも同じだと思うけれども、助成金など無い時代から自腹を切ってきた、この 30 年。事務局長の和田さんとも色々なところに行ってきた。アジアの演劇人が何を考えているのか。私たちの親たちが戦争という行いを、僕たちなりの責任の取り方を悶々としながらも続けている。

2009 年に、カナダの戯曲『ハイ・ライフ』を流山児事務所で持って行った。台湾で大ヒットした。その効果で『義賊☆鼠小僧次郎吉』という芝居、それまでは割と民間的な付き合いだったけど、これを台湾の芸術際に持って行った。チケットが 60 分で完売という事が起きた、それだけ待っていてくれたんだなと思った。そのときに、もっと広められないかなあと思っていて、相談したら薦められたのが汪

兆謙だった。場所は嘉義。台湾映画で永瀬正敏主演の『KANO』という作品がある。この映画をみたら一発でこの町が分かります。あと、嘉義の刑務所にビックリする。網走刑務所と同じなんですよ。日本の刑務所がそのまま残っている。日本の帝国主義が何をやっていたか、一番分かります。今日は、台湾の知る限りの事をたくさん話したいです。

○　柏　木

　では、お隣の方をご紹介します。「アジア・ミーツ・アジア」というフェスティバルを、プロトシアターを中心に主催されている大橋宏さんです。

○　大　橋

　どうも、はじめまして。大橋です。

　まずは簡単に、「アジア・ミーツ・アジア」を紹介します。1997 年から、「アジア・ミーツ・アジア」というタイトルを付けまして、ほぼ 20 年と少し、6 回ですがフェスティバルをやっています。フェスティバルでは、公演とワークショップとシンポジウムをやっております。だいたい日本の劇団とアジアの劇団の 6～8 劇団が集まって、同時期に公演を行う。お互いに見合って対話する。「アジア・ミーツ・アジア」ではキャンプのような形にしたフェスティバルを開いています。

　それとは別にコラボレーションですね。このあいだ数えたら 19 地域ですかね。ジャカルタからはじまってソウル、プサン。台北、高雄、それで、上海、香港、ハノイとかプノンペン、バンコク、ダッカとかカルカッタ、キルギスタン、テヘラン、バクダットなど。最終的に、2010 年の時にシリアの劇団を呼ぶことができた。僕にとって、日本におけるアジア、経済もそうですけど、文化交流というと東アジアが中心になるけれども、できるだけ西へ西へと進んだ結果、19 地域くらいの交流が生まれました。

　2018 年はインドツアーという形で、3 都市を巡る予定です。そのように、アジアの人との交流をずっと続けていて、はじめは東京中心に活動していたんですよね。だけども、やっていく内に、アジアとアジアが出会うのは東京中心ではなくて、よりアジアの色んな地域に行って、僕らがアジアの人を呼んで感動したのと同じように、アジア人相互が出会う必要があるだろう、必要というかその方が面白いだろうという事で、2012 年から少しずつですが「アジア・ミーツ・アジア」の活動を海外で行うようにしています。

　一昨年くらいのプサンでの街頭公演ですかね。図書館前の道路からはじまって、道路を突っ切って。まだ許されるんですよね、石を踏むという作業を 30 分くらい車止めて道路封鎖して行うとか、このあいだはプサンのマーケットで、今度は人の流れを止めずに街頭公演を行うとか。考えているのは劇場の中で何かが行われることだけを競い合うのではなくて、演劇が生まれる場所がどこなのか、ということ

が生活の現場であるとか興味があって。

　あと、僕が「アジア・ミーツ・アジア」で行くきっかけとなったのは、まだアジアを知らないという事。それと、東京でやっていると観客が限られてしまうという問いかけが生まれてきた事。香港のような都会とジョグジャカルタのような村では、全然観客層が違う。そういう観客層でも通じる舞台は何なのか。そういう事を考えていくと、アジアの人との出会いは本当に刺激的な時間。だから活動を続けています。また、アジアの人と付き合う難しさとか面白さとかも沢山ありますね。この辺で自己紹介を終わります。

○　**流 山 児**

　久々に会うけど、すごい活動をしているね。

続き、詳細は、

国際演劇交流セミナー2017-2018 年鑑にて

国際演劇交流セミナー2017-2018
―――― 年　鑑 ――――

■　目　次　Index　■

2017

デンマーク特集　－ ワークショップ・リーディング・シンポジウム　・・・・・・・・・・・・ 1
韓国特集　－ ワークショップ・レクチャー・シンポジウム －・・・・・・・・・・・・・・・・21
インドネシア特集　－ ワークショップ・レクチャー －・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
フランス特集　－ ワークショップ・シンポジウム －　・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93

2018

台湾特集　－ ワークショップ・レクチャー・シンポジウム －・・・・・・・・・・・・・・・・131
韓国特集　－ ワークショップ －　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・151
スイス特集　－ ワークショップ －　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・181
アルゼンチン特集　－ ワークショップ・レクチャー・シンポジウム－ ・・・・・・・・・・・199
国際演劇交流セミナー実施年表【1999 年～2016 年】　・・・・・・・・・・・・・・・・・・241

■　ご希望の方は、日本演出者協会 事務局までご連絡ください。

TEL : 03-5909-3074 ／ FAX : 03-5909-3075

E-mail : j_d_a_info@yahoo.co.jp